
ただしイケメンに限る

音無 無音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ただしイケメンに限る

【Zコード】

Z2356U

【作者名】

音無 無音

【あらすじ】

地味な彼女、久松美咲はある日突然彼氏ができる…？ その相手は足好きの変態なイケメン！ 調子に乗つたら挿絵が火をふく（

ry

地味（前書き）

足好きなんです。『めんなさい。

地味

「は？久松？ないよ、ない！可愛くねえじゃん
それがスタンダード、だつた。

ある日クラスで打ち上げ会に行くことになった。

「久松はどうせ地味な服なんだろうな」

「可愛いのもぜってえに合わねえよ」

待ち合わせ場所でグラグラ笑う男子たち。

まあ、来たのは本当にパークーにデニムのパンツという地味な服だった。

それからというもの。

何事も無くクラス会は終わった。

3

「美咲！買い物行こ」

「え？今から？いいけど」

愛奈こと、三上みかみ愛奈はクラス、

いや、学年一の可愛いこと謳われる。

会話のとおり、仲良しなのだ。

ついた場所はデパートの雑貨屋。

どうやら、お気に入りの雑貨でも買いに来たのだろう。

「向かい側の本屋にいてもいいかなあ？」

「美咲、本、好きだね。いいよ」

美咲はありがと、と小さく微笑んでいう。

そして本屋にかけていった。

(今はお金あんまり無いから、見るだけ)

辛いなあ、と苦笑する。

「うわっ！」

美咲が本屋に入ると、持っていた大量の本を崩してしまった人がいた。

「え、あと、大丈夫ですか？」

美咲が駆け寄ると彼は「だ、大丈夫だから！」

と言つてさっさと去ってしまった。

「？」

バレひきゅう?

(それにして、わつきの子、足綺麗だつたな)

そう振り返る彼は、朝場あわば数馬かずま。

所謂。

足大好きな、脚フェチ。

さつき捨うのを手伝おうとした
本には足のことしか書いてない、のではなく。

女性のファッション誌。

これ以上は色々な面で控えておこう。

ぼすん、と地味な音を立てて小さな手帳が落ちた。

「・・・・・・・・・生徒、手帳?俺の学校のじやねえな」

拾い上げてみると、わつきの彼女、美咲のものだった。

「！」

しゃがんだ寸前、落としてしまったのを間違えて拾つたのだ。

「・・・・・・・・・今から探すのもあれだしなあ。」

この中学近くだし、明日届けよう

「ない！」
「どーしたのあ？」
「手帳なくした！」
「明日誰か届けてくれるでしょ」
「だよねえ」
「だよねえ」
「探せよ。」

翌日。

早く出会わせたいから時間はやめるのやめるとか言わないで欲しい。

「・・・・・・・・・・・・

下校時である。

この大量の生徒の中からある一人を探すとなると、三年間通つてゐる生徒でなければ至難の技。が。

「あの！」

突然後ろから声がかかる。

案の定。

彼女だつた。

「あ、こ、これ……」

と、ぎこちなく手帳を渡す。

「ありがとうございます」

その笑顔で数馬はフリーズした。

「あの、よければ、なんですけど……、今日お茶どうですか？」

「あ、いいですよ？」

「ひとつ、条件なんですけど」

「？」

「ショーパン、一ハイ、あと、メガネで嘘つかず、に来てくれますか？」

「バレて、ますか」

「ええ、まあ」

ペンとアイスとお買い物

待ち合わせのカフ。

・・・・の、前。

「・・・・や、やあ」

「あの、どこか行く宛でもあるんですか？」

「え、ああ、決めてないな・・・・」

「まずは自己紹介しましょう?」

「え、ああ、そだな」

「あたしは、久松美咲です。」

「美咲か。ため口にしていいよ?俺は朝場数馬。」

「数馬、さん」

「数馬、つて呼んでおお」

「え? ! ああ、うん」

テンぱつて顔が一人して真っ赤だ。

行き先はショッピングとなつた。

「・・・・・・み、美咲つて足綺麗だよね」

(うわ、絶対セリフ間違えた。「セクハラ」つて言われて帰られる)
「ほんと? そこしか自信ないからさー」

(顔も十分かわいいよ! なんでメガネしてるの?)

「文具屋寄つてもいいかなあ?」

「いいよ、あ、俺アイス買つてくるけど、何がいい?」

「ん、つと、チョコ!」

オーケー、と相槌を打つて、彼はアイスの方へとかけていく。

(足舐めたいな)

(足好きならけつてあげたいな)

「ふええ！？」

店内で大声を出してしまった美咲に注目が行く。

「あ、なんでもないです！すいません！」

（ビビビビーしょー！大好きなこのペンのこの色が売り切れ…？ビー
しょお・・・・・）

インクの残量を思い出す。

思い出し、少ないことを再確認して落胆する。

「うう・・・・・、小六からこれで通してきたんだよなあ・・・・・
「そのペン俺持ってるよ」

「！ 数馬」

「うち来れば？」

「いいの？ つてアイスは？」

「金なかつた」

ペントマイスターとお買い物（後書き）

親しくなつすおてのわなじやなこよおおお

アイスと彼女（前書き）

恐縮です。
ごめんなさい。

アイスと彼女

「つめつけた」

べつとりと美咲の太ももにアイスが垂れた。
数馬の家のアイスである。

「テイ、ティッシュか何かちようだい！」

床に垂れる前に拭かないといふ。・・・

「……」すると数馬は語も置かず足に手を掛ける

五
五

二〇一

アイスはとれたと言うのに、彼はまだまだ続けていた。

「ああ、あれはまだおまえの手には届かない」

目の前にはあたたかく、シミンでほほほと数馬を凶る美咲。その動作が照れ隠しなのか。

可愛い

「かつ、数馬あつ」

さすがに分かつたのは寂しそうに離れる。

はノ力！」

とそつぽを向く彼女だった。

変える美咲を見送つたあと、彼の母親が一言言つてきた。

「ちっ、ちげえよ」

久松宅

(どーしょ。これからも付き合いもあるし、数馬と会う時だけメガネやめようかな)
と真剣に悩む美咲。

(どうせこれ、伊達メガネだし)
外したメガネをかたりと机に置く。

「美咲い？お風呂入つておきなさい」
と母の声。

「はあーい」

(まあゆっくり考えよ)

そう言つて風呂場に向かった。

アイスと彼女（後書き）

俺妹5巻欲しいです
あ、なんでもないです。

転校生

「転校生？」

「うそー。わざわざ会つたんだけどね、すっごこかつたよお
愛奈が言つただし、相当なんだろうなあ、と美咲は思つ。

「で、どのクラス？」

「うん~ううだよ？」

「・・・・・」

じゃなわけや謬がないよ、とはにかむ。

朝学活

「相原です、ようじく

相原 哲平。

まあ、そこそこのイケメンであつた。

数馬に比べれば・・・、とふと思つてしまつ。

「ね、ねつ、格好いいでしょ？」

「そーお?」

「・・・ぶー！美咲は朝場さんがいるからそのまま想つだよお

べしべしと背中を地味に攻撃してくる愛奈。

そしてしまこには「ばあか」と吐き捨てて拗ねてしまつ。

(お下様ね、もう)

はあ、と嘆息した。

(一歩惚れしたならモーいえばいいのに)

無駄に勘がいいのだ。

告白

「ここは屋上。

暑い夏でしかも太陽に一番近い場所だというのに今は風があるせいか涼しい。

「あの、早く帰りたいんだけど」

呼び出されたのはモテる愛奈でなく、美咲。

そして呼び出した相手は転校生であり、イケメンくんの哲平だった。

「…………メガネ、とつてもらえるかな」

「！」

咄嗟に一步後ずさる美咲。

（まさか、バレたとか！？）

かちやり、とメガネを直す。

「…………嫌よ。ブスだから素顔は嫌いなの」

「ふうん」

（何か証拠とかもつてそうね…………ここは従つか？）

「ねえ」

と哲平。

「…………」

美咲はメガネに手をかける。

「誰にも、言わないでね」と、メガネを外した。

「…………ッ」

彼は口を抑え絶句。

よほどギャップに驚いたのだろうか？

「最初…………ちょっと可愛いなって目を付けてたんだ……」

「…………」

喋りだす。

そして「俺…………」と言いかける。

「久松さんが好き」

「・・・・・・・・」

「返事はなんでもいいから、必ず、くれるかな」

「ええ、わかつた」

「あ、あと

「？」

そそくさと帰ろうとしている美咲。

美咲は哲平の方へ振り返った。

「可愛いのにどうしてそんなことしてるの?」

「・・・・・・・・・・あたしにも分かんないや」

夕日をバックにしたその笑みは

普段の彼女からは想像がつかないほどの綺麗な笑みだった。

家に帰つてから机の上にある携帯を手にした。数馬に言わなきや、告白されたこと……。と彼女は思つていたのだろう。

— 2 —

と血頭でシシドリを入れた。

ヤダヤダ何！？ヘ
別に報告なんて

糸は三を添え一一一元ぐなる

静かにおいた。

アリエの上に腰を下ろし難い顔で考える。

（……）数馬はおたじの「」などと思つてゐんがたゞ（

階下からは母親の夕飯を知らせる声。美咲は「うし」と気合を入れ降りていった。

結局。

夕飯の後、数馬にメールで告白のことを報告した。夕飯中ずっと悩んだ結果である。

「ええっと、何々？」

¶ НННН Н (· ·) Н Н Н Н

それだけかよ、つて突っ込みたくなった美咲。

がスクロールするうちに文章を見つける。

『今会える?』

「…………？」

タタタタ、と携帯を打鍵する。

返信を打っていた。

『了解』

女子にしては端的な返信だった。

待ち合わせの場所は近場の公園。そこから彼の家に行くらしい。

「ど、どうしたの?」

「…………いや、ガキに先取りされちゃって悔しいなって

「?」

「あのね

俺、お前が好きなんだ

返事は…………一応待つよ

「………………………」

耳まで真っ赤になる美咲。予期せぬ出来事があつたのだから仕方ない。

「えっと、そのつ

戸惑い言葉がうまく出でこない。

「あ、無理に言わなくていいよ

い。

「う、ううん…ここの…今言わせて
す、と一息。」

「あたしも、好きです」

我慢（前書き）

「うちの子は一筋縄ではいかないみたいだ。
ちょっとR-15つけとく

「い、今から家来れる?」
そんな数馬の問いに曖昧に応答する。一応イエスなんだけども。

「ごめんね、夜遅く」

泊まつてくれ?とはにかむ彼。美咲は顔を真っ赤にして首を横に振つた。

自分の部屋に入った二人。数馬は美咲を自分のベッドに座らせる。
「はい」と持ってきた飲み物を渡す。暑いせいか、グラスには水
が数滴伝っていた。

「これ何?」

「麦茶。」

夏らしい。

よく見ると数馬はフロアに座つている。

「えと・・・・・」

「いんだよ、俺はここで」

「??」

“今”美咲には理解できなかつた。
ふくらはぎにひんやりと何かが当たる。

「ひやあつ!?」

「あ、ごめん!」

数馬がグラスを当てたのだ。グラスの表面についていた水滴が足を
伝づ。

どうして当てたのかは知らないけど。

今度は数馬の手が触れる。

「・・・・ツ！？」

「驚かなくていいよ、大丈夫何もしない」

（何もしないじゃなくて、して欲しくない）よつ！あたし中学生ツツ（と心で叫ぶ美咲。心で叫んだだけなので通じつはずがない。

数馬は手で触れるだけでは我慢できなかつたのか、ふくらばぎに頬ずりしてくる。

（た、確かに足好きって言つてたけどお・・・・・・）

夏のせいじゃない。美咲は確實に顔が熱くなるのが感じる。

「ねえ」

「！」

数馬のいつもの声じゃない。何かに取りつかれたような甘い声。

「俺、忘れられないんだ」

「？」

「アイスが垂れたときの」

美咲は突つ込みたかった。变态か！？とか・・・・・・。

今更後悔しても仕方ない出会いつたときもう、フラグは立つてた。そう悶々と考えてるうちに数馬の顔はもう太ももにあつた。

「ちょ！？」

そして“あの田”的な感覚。何がが当たる。

「かづつ・・・・・、ひあ」

足で感じるとかあたしも情けない、と心の中で泣く美咲。

「ん？」

何かだんだん数馬が上に上がってきている、と思つ美咲。

「ばかっ！中学生だからね！？」

と思いつきり殴つた。

「つた！」

美咲の顔は真つ赤である。今一番の。

「ケチだな」

「ケチとかの問題じゃなーい！」

美咲はいつぞやのクツショーンを抱きかかえ拗ねた。

「じゃあキスしたら帰る？」

「ふーんだ」

とすねているが一応ねだる彼女。

そんな彼女に数馬は微笑みつつ軽いキスを落とした。

我慢（後書き）

(: < ^)

バレた！

翌日

「おはよお」

といつもの美咲。だが、クラスは違った。

ガタガタッ、と男子が立ち上がり、女子は見る目を疑つた。
そう、今田は伊達のメガネを家に忘れていた
だから素顔の可愛い彼女だったのだ。

「ああああー!? メガネ、メガネがないーー！」

今更気づく。そしてぺたぺたと自分の顔を触つて確認する。
「ふええ、ど、どーしょお」

その声にその仕草に、男子は胸を打たれ、女子は戸惑つ。

「・・・・・・・・数馬だ。数馬の家に忘れたんだ」

「あれー? 美咲、今日忘れたの? 珍しい、ていうか初めてー!」

「もひ、責めないで」

「昨日数馬さんの家いつたんだあ?」

「・・・・・・・・ツ」

真っ赤になる美咲。そして小さく「そ、そーだけどお?」と答える。

「数馬さんちよーつ喜んでたよお、はい、メガネ」

「なんで持つてるのおお」

がっくりと倒れ込んだ。今更バレてしまつているのにするのは白々しいのだ。

一人の男子が歩み寄つてきた。・・・・昨日の転校生だった。

「返事、くれるかな」

「・・・・・ごめんね、あたし、彼氏いるんだ」

「えつ、いつの間に数馬さんとそんな関係にー?」

「べー、だ! おっしえなーい」

授業中、昼休み、放課後と美咲への注目は学年へと肥大化していた。勿論、愛奈も一緒に行動したため周囲の目は更に大きくなりつつあった。

同じ“可愛い”でも、愛奈の可愛いは人形のような愛くるしい可愛さ。

美咲は大人っぽい綺麗な可愛さ。

そんな二人が一緒に歩いているんだ、振り返らない人はいない。

そんな彼女、美咲が口にする一言は

「ああ、早く帰りたい」

だった。

「美咲い、ルーズリーフちょうどいい？」

「ん、あー、はい！ってこれで最後か」

「うあ、ごめん！」

「大丈夫！今日買つてくる」

「・・・・・数馬さんとお？」

「もお、バカ！」

二人が会話しているだけでニコニコニヤニヤしている生徒だつてい
る。それだけで満足なのか？

放課後

「ごめん、待つたか？」

「え？ ううん、大丈夫」

「お前メガネは？」

「ああ、もうクラス中にバレちゃつてさ」

あはは、と嘆息混じりに笑う。

「じゃ、行くか？」

『スル

バレた！（後書き）

まだ終わらせねえ

お買い物つ

「じゃ、行くか？」

「うん」

二人は手をつなぎ、歩き始める。

やつてきたのは近場の本屋。数馬が本が欲しいと言っていたのを思い出したからだ。

それに本屋には多少の文具も揃えている（程度ではないんだが）。

「じゃあ、俺雑誌の場所にいるから」

「うん」

そう言つて二人は個々の任務を果たしに動いた。

「ふわあ、たかがルーズリーフされどルーズリーフだね」と感嘆する。

すらりと並ぶ沢山のルーズリーフに驚く美咲。目がキラキラしていた。

そこでふと目にしたのがピンク色のもの。

『このルーズリーフで恋の手紙を書くと叶つかも！？』

美咲の顔が一気に爆発するように赤くなる。

「ね、ね、ね、願いなんても、もうかなってる、しつ！」

テンパつて言葉がおかしい。

それでも美咲はいつもと同じのを買い、レジへ向かった。

「円になります」

「はあーい」

ちやつんとお金を置く。いつもと違つお店なので美咲は周りをキ

ヨロキヨロしている。

「お客様？お釣りですが・・・・・」

「ー？あ、ああ、すいませんー」

と、レシートを受け取る。

「ー、これなんですかー？」

美咲はレジのすぐ隣にあつたイラストに目をやつた。

「ああ、開店記念に俺が描いたモンです」

「へえー、可愛いですねツ！」

にぱあ、と無邪気な笑みを店員に贈る。

「・・・・・シ、あ、ありがとうござりますシ」

美咲は真っ赤になつた店員を置いて「えへへ」と可愛く笑いつつ数馬のもとへ行つた。

「かあ～すまー！」

「！ 美咲」

「それなにー？」

数馬が読んでいたのは、ファッショング雑誌。今もそれなりに悪くない服装なのだが。

「もうちょっと読んでいいかな？」

「んー、じゃあ、あたしはアレだ、漫画見てくる」

「アレだつて・・・・・・」

「出てこなかつただけですうー」

べー、と舌を出しつぱたぱたかけていった。

お買い物つ（後書き）

アレだつてうひちやつたのは俺のクセです
そのまま引用しました。
ごめんね、美咲イ

さい」

「なんなんですか、あなたたち…………」「お姉ちゃん、足綺麗だね？オレらとお茶しない？」

「ひへへ、そうそう、ねー？」

美咲は漫画の「コーナー」に入つた瞬間店内の死角が出来、囲まれたのだ。

「…………ツ」

その時感じた、数馬との違い。

ぴたりと誰かの手が触れた。

「きやあ！？」

「おじ声出させるなよ」

「すまーん」

違つ…………。

・・・・・・誰か・・・・・・。

そう叫びたかった。

「何してんの」

聞き覚えのある声。 数馬だ。

「かず・・・・・ツ」

今にも泣きそうな、悲痛な声。

「俺の女にえ出すなよ」

「つけ、逃げよつぜ」

「大丈夫？」

「…………うん。」

「そか」

立ち上がりゆうとする数馬の服の袖をつかむ。

「・・・・・あのね」

「うん?」

「あたし、あいつらに足を触られて分かつたの」

「?」

「やつぱり、数馬が好きつて」

「・・・・・クス、帰るか?」

「うん!」

美咲の笑顔は今一番、いや、それ以上の笑顔だった。

セレクション（後書き）

終わりさせていただきます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2356u/>

ただしイケメンに限る

2011年7月27日22時35分発行